

学園だより

No55
令和3年7月

発行
広島県立広島学園
東広島市八本松町原 10844
電話 (082) 429-0351

広島学園に着任して

園長 岡田 和子

このたび、令和三年四月一日付けで広島学園長を拝命いたしました岡田和子と申します。

広島学園は、子供達が二十四時間、三百六十五日生活する場ですから、子供の安心、安全な生活を保障し、成長を促す環境を整えるという責任の重さに、身の引き締まる思いがしております。一方で、広々とした敷地に、広いグラウンドと農場があり、周囲を木々で囲まれ、花壇やプランターには花が揺れており、鳥のさえずりが聞こえる学園の自然に気持ち癒されるようにも感じております。

広島学園に着任して、様々な気づきや驚きがありますが、子供達がしっかりと腰を入れた構えでシャベルや長い柄の草削りを扱い、作業をする姿もその一つです。このように上手に作業道具を扱える小中学生が日本中にどのくらいいるでしょうか。

作業は、自立支援施設における支援の中でも、一つの大きな柱です。作業は、道具の使い方を覚え上達すること、集中し最後までやり通すことを経て、任された仕事に対して達成する喜びを体験することができます。

多くの小中学生が携帯ゲーム機などで夢中になってゲームをするのは、ボスキャラを倒したり、なぜ解きやすめたりしてゲームをクリアすること、この達成感を手軽に手に入れることができるからだと思います。人間にとって何かを達成する喜びは、生きていくうえで大変重要な糧となるものと感じます。自然に触れ合い、実際に土の重さを感じ、額にかいた汗が風にあたって引いていくのを感じながら得られる達成感は、ゲームのそれとは、また味わいが違うのではないかと思います。

昨年度から新型コロナウイルス感染症の猛威が、私たちの生活に様々な影響を与えており、職員の研修や会議は、Webでの開催となるもの

も多くなっています。移動時間の必要がなく、遠方の者同士も手軽に集まることができ、大変便利ではあります。しかし、実際に顔を合わせて話し合う会議とは異なり、もどかしく感じたり、十分に意見を交換しきれなかった不全感が残ったりする場合もあり、実際に顔を合わせてやり取りすることの大切さをかえって実感することもあります。

広島学園では、毎日子どもたちと顔を合わせ、基本的な生活態度を身に着けることができるように支え、個々の課題に取り組めるよう援助しています。生活を共にしていれば、職員自身が自身の不完全さに直面することもありますが、児童自立支援施設運営指針に支援の在り方の基本として挙げられている「共生共育(生きた言葉・態度などの相互交流によって共に育ちあうこと)」、そして足りないところを補い合うチームワークを大切にしていきたいと考えています。

皆様方には、今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

学園行事

◆とんど

中二女子

私は「とんど」に参加して印象に残ったことがあります。私は、毎年「とんど」の行事に参加しているけど、火を近くで見るとはすごく怖いということです。また、竹の爆ぜる「パン！」という音もすごく印象に残りました。私は「とんど」を見ながら、今年も一年中健康で過ごしていけると良いな、私と関わっている人がみんな健康で過ごしていけると良いな、と思いました。今年の四月で中学三年生になります。中学の最上級生として、受験生としてしっかりとしていこうとも思いました。「とんど」の火で焼いたお餅はとても美味しかったです。私は、「とんど」に参加する中で、これからの生活の中で「何事にも向き合う」という目標を決めることができました。日本の伝統文化を改めて知ることもでき、良い体験になりました。退園後も、地域の「とんど」に参加したいと思いました。



◆梅見茶会

中一 男子

梅見茶会で茶道を教わりました。前回は、戸を開けて移動することを学び、今回はお茶の点て方を主に学びました。僕は、上手く泡立てることができませんでした。でもそこから茶道の奥深さを知りました。茶筌での混ぜ方によって大きな差が出てきました。今回は「藤の名月」と言うお菓子もいただきました。甘くてとても美味しかったです。和室にある「和敬静寂」の掛け軸のことも知りました。「和やかに・敬う・心まで清らかに・動かない心」と言う意味でした。今後の生活では、「和敬静寂」、特に「敬う」を意識していこうと思いました。また、家に帰ってから、自分でも抹茶を点ててみようと思いました。「真の礼」も意識しようと思います。今日はとても貴重な体験ができました。お忙しい中、茶道を教えてください、ありがとうございます。また次の機会にも茶道を学びたいと思いました。その時はよろしくお願いします。



◆スキー合宿

中一 男子

僕はスキー合宿に参加して『感謝』ということを改めて学びました。例えば、スキー道具一式（スキー板・スキーブーツ・手袋。帽子・ゴーグル）を貸してもらい、感謝をして大切に使うということです。何事も誰かに力を貸してもらうことが、このスキー合宿では多かったです。だからこそ、感謝を忘れてはいけないということを改めて学ぶことができました。スキー合宿では沢山美味しいご飯も食べさせてもらいました。苦手な食材が入っていたのですが、美味しく食べられるように工夫がしてありました。これも感謝を忘れてはいけないと思いました。また、僕たちが緑荘に到着した時にご主人と奥様が笑顔で迎え入れて下さったことにも感謝しています。次に学んだことは、班長を支えると言うことです。班長と班員がもめている時は、僕が班員と話をし、班長の負担を少なくすることや班長が上手くスキーが滑れない時は、班長が少しでも楽しく出来るように色んなアドバイスをしてみたり、班長のことを色々なところでサポートすることを頑張りました。班長は、色んな所で苦戦して

いたのですが、少しでも僕が助けることができたと思うので良かったです。スキーでは、最初はなかなか上手く滑ることができず転んでばかりでした。でも先生方から助言をもらったので、パラレルターンが少しだけ出来るようになりました。パラレルは、まだまだ少ししかできませんが、ボーゲンで滑ることは多分パーフェクトです。それは全て先生方のおかげです。僕が下手で先生にぶつかって倒しても、先生は謝るとすぐに立ち上がって教えることを再開してくれました。そのおかげで上手くなれたのだと思います。もう一人、ぶつかって倒した先生は、自分が悪いと言つて、倒れたのを僕のせいにはしませんでした。そこで、僕はこの先生のように心の広い人間になりたいと思いました。本当にその時は、嬉しくて感動しました。また、最初の時はリフトを何度も止めてしまいました。その時、止まって待つてくれた人達も文句ひとつ言わずに待つてくれて、僕の寮もこんな雰囲気だといいなと思ったので、僕がそんな寮を作れるように頑張りたいです。

この合宿で、スキーの技術はもちろん、自分の力だけではできないこともある、ということを改めて学んだ

ので、これからの寮生活で沢山の寮生を支えられるように頑張ります。



中一 女子

私は、スキー合宿をおして改めて学園生活は色々な所につながっていると思いました。私はスキーをするのが初めてで、分からないことだらけでした。そういった時に、先生方からアドバイスをもらいました。そのアドバイス通りにできることもありました。できないこともあつて「無理!」と思うこともありましたが。しかし、やってみると案外できて嬉しかったし、楽しかったです。そういった経験を二泊三日繰り返すことで気づいたことがあります。一つ目は、学園生活で注意やアドバイスなどをしてもらった時に、素直に聞き入れようと言うことです。素直に聞き入れれば、直ぐに成長できるといふようになります。注意されてイライラして変わらないのと、注意されて「はい。すみませんでした。」と言つて変わるのとでは、変わる

ほうが自分にとっても得だと思えます。このことに気づくことで、これからの学園生活にも生かせそうです。次に人と協力し合うと言うことです。スキーができなくてしんどそうな人に「大丈夫ですか」と声をかけることで、相手からも「ありがとう」と言ってもらえました。寮生活でも、色んな場面で協力し合っていることで、こういった場面でもそれができるようにになりました。私が助けてあげること、自分が困った時にも助けてくれる人ができます。そのことを学園生活やスキー合宿で改めて知りました。こういった経験から、学園でしていることは退園後にも良い影響を与えてくれると分かりました。お礼を素直に言えることも大切です。謝ることを素直に言えることも大切なことです。学園で生活しているとなかなか気づきにくいことも、外に出たら気付くことができました。これも良い経験になりました。スキー合宿で楽しむのも良いけれど、学園生活に活かせるようにすることも大切だと思います。まだスキー合宿を終えてそんなに時間がたっていないから、こういった考えがあります。時間が経っても、今回得たものをこれから生活に活かします。先生方にも、

スキー合宿をおして「変わった」「成長した」と思ってもらえるように努力をしていきます。今回、貴重な経験ができたのは、沢山の方々のおかげです。本当に感謝しています。その感謝の思いをこれからの生活・行動でしっかりと表していきます



◆緑荘のみなさんへ

中一 男子

コロナ禍の中、またお忙しい中、三日間本当にお世話になりました。

最初は、どんなところかすごく不安でした。緑荘の入り口で、夫婦二人で出迎えてもらった時に、何か自然と緊張がほぐれました。僕たちのために、スキーウェアやブーツ、スキー板、ゴーグル、ニット帽などを貸し出してもらい、とても美味しいご飯を三日間も食べさせてもらい本当に感謝しています。美味しいご飯のおかげで、スキーをたくさん滑ることができました。美味しくて、ついご飯のお替りを何回もしてしまいました。講話会では、緑荘の歴史や大山のこと、どうやったら美味しいご飯

飯が作れるかなど、色々なことを学ぶことができました。お風呂は、浴槽がブクブクなつてすごく綺麗なお風呂でした。すごく気持ち良かったです。緑荘の方も大変な中で、他のお客様を断って、学園のために貸し切り状態にして頂き、本当にありがとうございました。僕が大人になつて大山にスキーに行く時があれば、緑荘に泊まらせてもらいたいと思います。



◆アイマスク体験

小六男子

今回の講演で分かったことは、視覚障害の人が使いやすいように作られている物が色々あると言うことです。例えば白杖や点字ブロック、点字などです。他にも、実際に白内障などの体験をしてみると思ったよりも見えにくかったことです。びっくりしました。アイマスク体験の中で思ったことは、補助するときに良い指示が出せずにいたので、指示をすると言うことはとても難しいと思いました。相手のことを考えて指示すると良いのかな、と思いました。他にも、アイマスクをして歩くと、普

通に歩いていた校舎なのに、急に違う所に来たみたいで、とても不安になりました。今回の経験を生かして、白杖を持っている人を見かけたら、積極的に声をかけて、相手の気持ちになつて補助することをしていきたいと思っています。



「共食」の思想

前園長 半田 浩正

(令和三年三月退職)

桜の開花の便りが届く季節から紫陽花の季節となりましたが、コロナ感染症対策の励行は広島学園でも継続中です。

他の機関や施設等とも重なるでしょうが、主な対策は施設内の定期的な消毒、生活・行動様式の制限、恒例行事の中止や縮小です。当学園も含め、児童自立支援施設の平均在学期間が全国的に一〜二年であることを踏まえると、コロナ禍の中で過す一年とそうでない場合の一年では、学園での生活の意味が、ずいぶん変わってしまうのではないかと、園長

として内心忸怩たるものがありました。

入所に至るまでの児童の多くは、比較的、社会的な行事や家庭でのイベントの経験に乏しいことから、例年、学園ではとんどや梅の実収穫体験、寮での誕生日会等々、支援団体の御協力も得ながら、園内外での行事を数多く準備して、様々な経験を増やす取り組みを行っています。特に園外行事のほとんどがコロナ禍で中止となりました。

このような行事等の体験を積み上げ、社会性の涵養を目指すことと同等、いやそれ以上に学園で大切にしているのは、当たり前の日常生活に身を置き習慣化すること、即ち基本的生活習慣の確立です。この基本的生活習慣の確立に向けて、コロナ禍で最も悪影響を受けたのが、「食」習慣です。

普段であれば、入所児童は職員とともに毎日三食ともに家庭寮の食堂に全員が集結し、各寮が交替制で委託業者の調理員さんが作ってくれた料理の配膳を担い、寮ごとに丸テーブルを囲んで対面して食事を摂ります。その中で、一定のマナーには留意しますが、授業中や寮学習中とは異なり、時には談笑しながら、また

みんなが好物のカレーライスが主食メニューになった時などには、おかわりのライバルを横目で見ながらマナーすれすれの猛スピードで一杯目を掻き込むといった、微笑ましく楽しいひと時を過ごしてきました。しかしながら、この一年あまりは、感染症対策として食事スタイルそのものからの変容を決断せざるを得ませんでした。まず食堂に全員が集結することを止め、当番寮が配膳したものを各寮に運び、寮生各人が学習用に壁に直面させて他児のそれと一定の距離を開けている机と椅子に一人分を取り分け、つまりは個別に壁面して三食を摂っているのが現状です。その上、もちろんこれも感染症対策としておしゃべり厳禁です。

古来、人間の食事には、栄養の補給以外にも他者との関係の維持や調整という機能が付与されてきた。

(サルとの違いは) 人間が食事を人と人をつなぐコミュニケーションとして利用してきたことだ。(中略) 人間はできるだけ食物を仲間といっしょに食べようとする。ひとりでも食べられるのに、わざ

わざ食物を仲間の元へもち寄って共食するのだ。

顔の表情や目の動きをモニターしながら相手の心の動きを知る能力は、人間が生まれつきもっているもので習得する必要がない。(中略) 対面して相手の動きを追いながら同調し、共感する間柄をつくることができるのが、人間の特有の能力なのだ。それが人間に独特な信頼関係を育み、高度で複雑な社会の資本となってきたと考えることができる。

(山極寿一／『ゴリラからの警告』)

山極氏はゴリラ研究を中心とした世界的霊長類・人類学者ですが、長々と引用したのは他でもありません。学園のみならず全世界的に「共食」が抑制され、日本では「孤(個)食」が社会問題化し、「会食」の在り方が問われている今こそ、「共食」の意味を確認しておきたかったからです。

山極氏によれば、生物の中で唯一「共食」をするのが人間です。他の生き物が集まって食べているのは、実は目的意識もなく個別ばらばらの「群食」に過ぎません。人間だけが

太古から食物の平等な分配を実現して「共食」し、そこから共感性や信頼関係を育み、遂には社会を形成し得たと山極氏は説きます。

「共食」をはじめ生活全般、行事等の体験は学園の重要な成長ツールですが、一般家庭や他の様々な施設等でもコロナ禍において同様の制限の中にあります。学園としては、成長ツールの意義を再確認しつつも、困難な状況を嘆くばかりでなく、支援者・支援団体のお力添えを頂きながら、限られた中でも実現・実行できる行事や生活支援の一面面一面面をこれまで以上に大切に、児童に成長する場を提供し、全職員がその成長に貢献する学園であり続けたいと願っています。



《ホームページ》

広島県のホームページの中に、「県立広島学園」のページがあります。支援者の方との交流や学園の行事の様子などを掲載していますので、ぜひ、ご覧下さい。

(<https://www.pref.hiroshima.jp/sis/hirosihinagakuen/>)